

て良い環境が与えられる人でももらうことはできない。

保健所については、少し説明がいるだろう。各区の保健所は、市民の健康と衛生に責任がある。もし誰かが野良犬を見たと通告すれば、保健所はすぐに捕獲する。法的には放し飼いは違反であり、すべての犬は登録されなければならない。その結果、鎖につながれた犬の多くがストレスで苛立ち、吠えるわけだ。また、人々が飼うのをやめた動物や、望まれずに生まれた小犬、子猫なども同様に、保健所に持ち込まれる。各区の保健所を回れば、捕獲された野良犬や、ご用済みとなったペットたちが、コンクリートの檻の中にいるのが見られるだろう。

その動物たちは、中央の保健所に運ばれ、3日間置いた後（迷い犬などの場合は、飼い主が現われるかもしれないので）、殺される。森ノ宮ではガス室が使われている。以前は人が棒で殴って殺していたが、（和歌山では昨年までこの方法だった）最近では人手がかかるため、ガス室に切り替えられている。いちばん苦痛が少ないとされる注射による安楽死は、手間とコスト的な理由で、まだ実行されていない。人を噛んだ犬は、狂犬病の恐れから2週間以上も収容される。日本では過去33年間も、狂犬病が現われたという例はないにもかかわらずだ。

また、毎日直接犬の処分に手を下す人々にも、非がないとはいえない。いくら仕事といっても、自分の子供にどう説明するのか。子供は友達に「お父さんのお仕事は？」と聞かれて、「犬を殺すことだよ」とでも言うのだろうか。

保健所に常駐する獣医に地下の収容所を案内してもらったが、彼らは非常に丁寧で、日々の残虐とは無縁のようにみえた。最初の印象は、異常な静けさであった。普通50匹以上もの犬がいて、人が来れば吠えたり、くんくん鳴いたり、しっぽを振るのが普通である。しかしここでは生き物がいないかのように、静かであった。魂が抜けてしまったかのような犬たちは、こまかく身体を震わせながら立っていたり、座っていたり、横たわっていたりする。多くの犬は壁側を向いており、こっちを振り返る犬はほとんどいない。犬たちの目からは、どんな感情も消え去ったかのようにみえた。生きる